

ある種の偏微分作用素の Cauchy 問題の一意性

京大理 大鍛治隆司 (Takashi Ōkaji)

§1 序

我々は、次の形の作用素 P を考える。

$$t^k P(x, t, D_x, D_t) = \tilde{P}(x, t, t^\nu D_x, t D_t)$$

$$= (t D_t)^m + \sum_{\substack{|\alpha|+j \leq m \\ j \leq m-1}} a_{\alpha, j}(x, t) (t^\nu D_x)^\alpha (t D_t)^j,$$

ここで、 $0 \leq k \leq m$, 整数, ν : 正の有理数, $D_t = \frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial t}$, $D_x = \left(\frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial x_1}, \dots, \frac{1}{i} \frac{\partial}{\partial x_m} \right)$, $a_{\alpha, j}(x, t) \in C^\infty(\bar{\Omega})$. (Ω は原点のある近傍).

この作用素 P に対する Cauchy 問題の解の一意性を調べるのが目的である；

問題

$$(1) \quad \begin{cases} P u = 0 & \text{in } \Omega \\ \partial_t^j u = 0, \quad j=0, 1, 2, \dots, \infty, & \text{on } \Omega \cap \{t=0\} \end{cases}$$

$\Rightarrow u \equiv 0$ in $\exists \omega$: 原点のある近傍 ?

この問題について、最近 G. Roberts ([6]), H. Uryu ([7]), S. Nakane ([5]) などによつて、ある結果が得られた。これは、彼らの結果の低階に関する条件を取り除くことを考えた。

正確に言えば、次のようになる。

$\hat{P}_m(x, t, \xi, \tau) = \tau^m + \sum_{\substack{0 \leq j \leq m \\ j \neq m-1}} c_{\omega_j}(x, t) \xi^j \tau^j = 0$ のてに關する根を $\lambda_j(x, t, \xi)$ ($j=1, 2, \dots, m$) とする時

- 仮定
- 1) real根 λ_j は simple, non-real根 λ_j は高々 double
 - 2) non-real根 λ_j は $|Im \lambda_j| \geq \varepsilon > 0$ on $\bar{\Omega} \times S^{n-1}$ をみたす。
 - 3) distinct roots λ_j, λ_k は $|\lambda_j - \lambda_k| \geq \varepsilon > 0$ on $\bar{\Omega} \times S^{n-1}$ をみたす。

定理 上の仮定の下で、 $u \in C^\alpha(\bar{\Omega})$ が (1) の解ならば、ある原点の近傍 U があって、 $\forall \tau \in U$ $u \equiv 0$ となる。

注意1 瓜生氏は根 λ_j がすべて simple という条件の下に、又 Roberts 氏 ($0 < v \leq 1$) 及び中根氏 ($v \in \mathbb{Z}, k=m$) は、上の仮定とともに、低階にある条件をつけて (もし 3 人 double root が存在する時) 上と同じ結果を示された。

注意2 今考えていいる作用素 P において、 $v=1, k=m$ これらは、 Σ の作用素は、かつての非特性作用素を特別の場合として含んでいた。これらについては、 Calderón 氏が根が simple の場合を解決し ([3]), Mizohata 氏が non-real 根は高々 double まで許されることを示された。 ([4])。 Σ の方面のより詳しい文献については、 Zyjly 氏の lecture note 等を参照されたい。

上の定理は、退化型作用素と非特性作用素の結果が、完全に対応していることを示唆している。 Σ の種の事実は、双曲型作用素の well-posedness の問題について、田原氏が初めて指摘

された。([9])

§2. 証明の概略. その 1. (作用素の分解)

証明の大筋は、以前のものと本質的には変わりません。（重み γ をもつ Carleman estimate ([9]) による。）ただ、この場合、低階を無視して議論を行なうわけにはいきないので、まず作用素を低階を除いて、高々 2 階の作用素の積に分解します。そしてこの分解された各々の作用素を micro-local に解析します。

以後、簡単の為に、 $k=m, \nu \in \mathbb{N}$ の場合に話を限定します。
そうすれば、 P は次のようになります。

$$\begin{cases} P = D_t^m + \sum t^{\lambda_{ij}} a_{ij}(x,t) D_x^\alpha D_t^\beta \\ \lambda_{ij} = (l+1)|\alpha| + j - m, \quad a_{ij}(x,t) \in C^\infty(\bar{\Omega}) \end{cases}$$

前の記号では、 $\nu = l+1$ に対応する。又 λ_{ij} は負とならないように。

Carleman の手法を P に適用する為に、(1) の解を x について compactly supported の関数に変換しなければなりません。この場合、 t の degenerate factor が重要であることを考慮して、Holmgren 変換ではなく、次の singular な変換を行ないます。

$$\begin{cases} x = X \\ t = (\delta - \rho |X|^2)^{-1} \end{cases}$$

(この種の変換は、Balogh & Zachmanoglou ([2])において初めて使用された。) そうすれば、「 $U(x,t) \in C^\infty$ で $t=0$ で flat $\Rightarrow \tilde{U}(x,\tilde{t}) \in C^\infty, \tilde{t}=0, |X|^2 = \delta$ で

"flat" となり、適当に修正すれば、 $A(x,t) \in C_0^\infty$, $P^# A = 0$, $\sum_{j=0}^l |A_j| = 0$ ($j=1, 2, \dots, l$) が得られます。ここで $P^#$ は上の変換で P が得られる作用素です。簡単の為に (x,t) を再び (x,t) で書けば、

$$P^# = D_t^m + \sum_{\substack{0 \leq j \leq m \\ j \neq m-1}} t^{l(j)} f(x)^{(j)} A_{j+1}^#(x,t) D_x^j D_t^j$$

$$f(x,t) = (\delta - b|x|^2)^{\frac{2(l+1)}{n+1}}, \quad A_{j+1}^* \in C^\infty \quad \text{となります。}$$

$P^#$ に対する仮定より、 $P^#$ に対して次の事が成り立ちます。

$$\left\{ \begin{array}{ll} P_m^*(x,t,\bar{x},\bar{t}) = \prod_{j=1}^r (\bar{t} - t^j f(x) \lambda_j^*(x,t,\bar{x})) \prod_{j=r+1}^{r+s} (\bar{t} - t^j f(x) \lambda_j^*(x,t,\bar{x}))^2 \\ |\lambda_i^* - \lambda_j^*| \geq \varepsilon \quad \text{if } i \neq j \\ |\operatorname{Im} \lambda_j^*| \geq \varepsilon \quad j = r+1, \dots, r+s. \\ \operatorname{Im} \lambda_j^* \equiv 0 \text{ or } |\operatorname{Im} \lambda_j^*| \geq \varepsilon, \quad j = 1, 2, \dots, r, \quad (x,t,\bar{x}) \in \Sigma^* \times S^{n-1}. \end{array} \right.$$

又、 λ_j^* を適当に修正するなどによつて、 $\lambda_j^* \in S_p^1(\mathbb{R}^n)$ で上の条件を $(x,t,\bar{x}) \in \mathbb{R}^n \times [0, T_0] \times S^{n-1}$ で満たしているとしてもよいことが分かります。

問題は $P^#$ について

$$(*) \quad \|t^{-\gamma} u\|^2 \leq C \|t^{-\gamma} P^# u\|^2, \quad u \in C_0^\infty(\omega \times [0, T])$$

という不等式が成り立つか？ といふことには帰着されます。（ t^γ といふ重みは、Ainhac & Baouendi [1] において初めて使われた。）

そこで、作用素 $P^#$ を分解して (*) を調べる事になる。その為に、少し記号を導入しておく。

$$L^j \ni A \Leftrightarrow \sigma(A) \in S_{1,0}^j(\mathbb{R}^n) \quad (\sigma(A) \text{ は } A \text{ の シンボル})$$

$$T^j \ni B \Leftrightarrow B = \sum_{d+k=j} t^{(l+1)d+k-j} f(x)^d A_{d,k}(x,t,D_x) D_t^k, \quad A_{d,k} \in L^d.$$

$\lambda_j(x, t, D_x) \in L^1$ を $\lambda_j^*(x, t, \xi)$ を symbol とする作用素。
 $\partial_j = D_t - t^\ell f(x)$ $\lambda_j(x, t, D_x) \in T^1$ とする。この時 R の命題が成り立つ。

命題1 任意の置換 π について、

$$P^* = e_{\pi(1)} \cdots e_{\pi(r+s)} + t^2 r_{m-2}$$

$$e_j = \begin{cases} \partial_j + t^{-1} a_j(x, t, D_x) & j=1, \dots, r \\ \partial_j^2 + t^{-1} (a_j(x, t, D_x) D_t + t^\ell f(x) b_j(x, t, D_x)) & j=r+1, \dots, r+s, \end{cases}$$

$$a_j \in L^0, b_j \in L^1, r_{m-2} \in T^{m-2}.$$

命題2 $r_{m-2} \in T^{m-2}$ について、

$$r_{m-2} = \sum_{i,j=1}^r Q_{i,j}(x, t, D_x) \prod_{k=1}^{r+s} e_k + \sum_{j=r+1}^{r+s} Q_j(x, t, D_x) \prod_{\substack{k=1 \\ k \neq i, j}}^{r+s} e_k + t^{-1} r_{m-3}.$$

$$Q_{i,j}, Q_j \in L^0, r_{m-3} \in T^{m-3}$$

この2つの命題は、 R の3つの補題をくり返し使うことによって示されます。

補題1 ([5], [6], [7]) $i \neq j$ とする時、 $r_i \in T^1$ は次のようには書ける。

$$r_i = Q_1 \partial_i + Q_2 \partial_j + t^{-1} Q_3, \quad Q_j \in L^0, (j=1, 2, 3)$$

補題2 $i \neq j$ とする時、 $r_i \in T^2$ は

$$r_i = Q_1 \partial_i^2 + Q_2 \partial_j + t^{-1} Q_3, \quad Q_1 \in L^0, Q_2, Q_3 \in T^1$$

と書ける。

補題3 $i \neq j$ の時、 $r_i \in T^3$ について。

$$r_i = Q_1 \partial_i^2 + Q_2 \partial_j^2 + t^{-1} Q_3, \quad Q_1, Q_2 \in T^1, Q_3 \in T^2 \text{ となる。}$$

これらの補題は、 $|\sigma(\lambda_i - \lambda_j)| \geq \delta > 0$ on $\mathbb{R}^n \times [0, T] \times S^{m-1}$ を用いて symbol 計算によって示される。

命題1, 2を用いれば、不等式(*)は、次の2つの不等式より得られることがわかる。 $v \in C_0^\infty(\Omega' \times [0, T])$ に付し。

$$(2) \quad \gamma \|t^{-r} v\|^2 \leq C \|t^{-r} \partial_j + t^l a(x, t, D_x)\| v\|^2 \quad (\gamma > \gamma_0)$$

$a \in L^0, \quad j=1, \dots, r+s.$

$$(3) \quad \gamma^2 \|t^{-r-2} v\|^2 + \|t^{-r-1} D_t v\|^2 + \|t^{-r+l-1} f(x) D_x v\|^2 \\ \leq C \|t^{-r} \partial_j^2 + t^l r(x, t, D_x, D_t)\| v\|^2. \quad (\gamma > \gamma_0)$$

$r \in T^1, \quad j=r+1, \dots, r+s.$

(2)の不等式は、すでに [5], [6], [7] 等において示されている。

(3)の不等式については、 $\sigma(r)(x, t, \xi, \lambda_j)$ が十分小さい時は、本質的には、[5], [7] において示されている。

§3. 証明の概略。(不等式(3)の証明)

(3)の証明の概略について述べる。まず $r(x, t, D_x, D_t)$ を次のように表わします。

$$r(x, t, D_x, D_t) = a(x, t, D_x) \partial_j + t^l f(x) b(x, t, D_x)$$

$a \in L^0, b \in L^1$

この時、次の3条件のうち少なくとも1つがみたされるよう (conic n.b.d. の有限和に分解します。)

$$\omega \times [0, T_1] \times \mathbb{R}^n \setminus \{0\} = \bigcup_{k=1}^N \omega \times [0, T_1] \times W_k, \quad \omega; \text{十分小さな原点の近傍}, \quad T_1: \text{十分小さな正数}.$$

- $$\left\{ \begin{array}{l} 1) \operatorname{Im} \lambda_j^*(x,t,\xi) < -\varepsilon, |b(x,t,\xi)| < 2^{-12}\varepsilon^2 \\ 2) \operatorname{Im} \lambda_j^*(x,t,\xi) < -\varepsilon, |b(x,t,\xi)| > 2^{-11}\varepsilon^2 \\ 3) \operatorname{Im} \lambda_j^*(x,t,\xi) > \varepsilon \end{array} \right.$$

うるさく、上の分解に付随した単位分解を用いるとよって、不等式(3)は、 $\exists \gamma$ の命題が成り立つことになります。

命題3 $\forall k \in \mathbb{N}_0$, $\operatorname{supp} \sigma(\gamma_k) \subset W \times [0, T_1] \times W_k$ とする。ある正の定数 C, T_2, γ_0 がある。 $0 < T \leq T_2, \gamma > \gamma_0, v \in C_0^\infty([0, T]; \mathcal{S}_x(\mathbb{R}^n))$ に対して。

$$\begin{aligned} & \gamma^2 \|t^{-r-2} \gamma_k v\|^2 + \|t^{-r-1} D_t \gamma_k v\|^2 + \|t^{-r+\frac{n-1}{2}} f(x) D_x \gamma_k v\|^2 \\ & \leq C \|t^{-r} L \gamma_k v\|^2 + C(r + \frac{1}{\gamma}) E_r(v). \end{aligned}$$

$E_r(v) = (3)$ の左辺。

この命題は次の2つの補題を基礎とします。

補題4 $Q = \partial_j + t^{\frac{r-1}{2}} f(x)^{\frac{1}{2}} A_{\frac{1}{2}}(x, t D_x)$, $A_{\frac{1}{2}} \in L^{\frac{1}{2}}$. 今, $\operatorname{Im} \lambda^* < -\varepsilon$ on $W \times [0, T_1] \times W_k$ とする。この時, $\frac{1}{T}$, γ を十分大にすれば, $v \in C_0^\infty([0, T]; \mathcal{S}_x(\mathbb{R}^n))$ に対して。

$$\begin{aligned} & \frac{r+1}{6} \{ \gamma \|t^{-r-1} \gamma_k v\|^2 + \varepsilon \|t^{-r+\frac{n-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda^{\frac{1}{2}} \gamma_k v\|^2 \} + C \gamma^{-1} \|t^{-r} D \gamma_k v\|^2 \\ & \leq \|t^{-r} Q \gamma_k v\|^2 + CT \|t^{-r-1} \Lambda^{\frac{1}{2}} v\|^2, \text{ 成り立つ。} \end{aligned}$$

$$\Lambda \in L^1, \sigma(\Lambda) = \sqrt{1 + |\xi|^2}.$$

補題5 $\operatorname{Im} \lambda_j^* > \varepsilon$ on $W \times [0, T_1] \times W_k$ とする。 $\frac{1}{T}, \gamma$ を十分大にすれば, $v \in C_0^\infty([0, T]; \mathcal{S}_x(\mathbb{R}^n))$ に対して。

$$M \gamma \|t^{-r-1} \gamma_k v\|^2 + M \|t^{-r+\frac{n-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda^{\frac{1}{2}} \gamma_k v\|^2 + C \gamma^{-1} \|t^{-r} D \gamma_k v\|^2$$

$$\leq \|t^{-r} \partial_j \gamma_k v\|^2 + CT \|t^{-r-1} \Lambda^\alpha v\|^2 \quad \text{が成り立つ。}$$

この 2 つの補題の証明は後に回ねて、先に、命題 3 の証明について述べましょ。

まず最初に、2) の場合は、仮定より、 L を更に次のよう分解する二ことが出来ます。

$$\begin{aligned} L \gamma_k &= Q_1(x, t, D_x, D_t) Q_2(x, t, D_x, D_t) \gamma_k + t^{\frac{r}{2}} a(x, t, D_x) Q_2(x, t, D_x, D_t) \gamma_k \\ &\quad + t^{\frac{r-1}{2}} f^{\frac{1}{2}}(x) d_{\frac{1}{2}}(x, t, D_x) \gamma_k + \{d_{0,1}(x, t, D_x) + t^{\frac{r-1}{2}} d_{0,2}(x, t, D_x)\} \\ &\quad \times \gamma_k + \{d_{b,1}(x, t, D_x) + t^{\frac{r-1}{2}} d_{b,2}(x, t, D_x)\}. \\ &= \dots \quad Q_i = D_t - \lambda_j(x, t, D_x) + (-)^i t^{\frac{r-1}{2}} f^{\frac{1}{2}}(x) g_{\frac{1}{2}}(x, t, D_x), \quad (i=1, 2) \\ &\quad g_{\frac{1}{2}}, d_{\frac{1}{2}} \in L^{\frac{1}{2}}, \quad d_{0,i} \in L^0, \quad d_{b,i} \in L^{-1}, \quad (i=1, 2) \end{aligned}$$

従って、 γ の時、補題 4 を Q_1, Q_2 に対して適用すれば命題 3 が成立する二ことがわかります。実際。

$$\begin{aligned} \|t^{-r} L \gamma_k v\|^2 &\geq \frac{1}{2} \|t^{-r} Q_1 Q_2 \gamma_k v\|^2 - C \left\{ \|t^{-r-1} a Q_2 \gamma_k v\|^2 \right. \\ &\quad \left. + \|t^{-r+\frac{r-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda^{\frac{1}{2}} \gamma_k v\|^2 + T \cdot \|t^{-r-2} \gamma_k v\|^2 \right. \\ &\quad \left. + T \cdot \|t^{-r-2} \Lambda^\alpha v\|^2 \right\} \\ &\geq \left(\frac{1}{2} \right)^0 \left\{ \gamma^2 \|t^{-r-2} \gamma_k v\|^2 + \gamma \varepsilon \|t^{-r+\frac{r-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda^{\frac{1}{2}} \gamma_k v\|^2 \right. \\ &\quad \left. + C \|t^{-r-1} D_t \gamma_k v\|^2 + \frac{1}{2} \varepsilon^2 \|t^{-r+1} f \Lambda \gamma_k v\|^2 \right\} \\ &\quad - C \gamma^{-1} \|t^{-r} Q_1 Q_2 \gamma_k v\|^2 - C(T + \gamma^{-1}) E_r(v). \end{aligned}$$

一方、2) の場合は、補題 4 を $G_{\frac{1}{2}} \equiv 0$ として、 ∂_j に適用すれば

$$\begin{aligned} \|t^{-r} \partial_j^2 \gamma_k v\|^2 &\geq \frac{1}{144} \left\{ \gamma^2 \|t^{-r-2} \gamma_k v\|^2 + \gamma \varepsilon \|t^{-r+\frac{r-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda^{\frac{1}{2}} \gamma_k v\|^2 \right. \\ &\quad \left. + C \|t^{-r-1} D_t \gamma_k v\|^2 + \frac{1}{2} \varepsilon^2 \|t^{-r+1} f \Lambda \gamma_k v\|^2 \right\} \end{aligned}$$

$$-C(\gamma + \gamma^{-1}) F_\gamma(v)$$

が得られ、

$$\begin{cases} \|t^{-\gamma+\ell-1} + b \gamma_k v\|^2 \leq 2^{-12} \varepsilon^2 \|t^{-\gamma+\ell-1} \gamma \gamma_k v\|^2 + CT \|t^{-\gamma-2} v\|^2 \\ \|t^{-\gamma-1} a \partial_j \gamma_k v\|^2 \leq C \gamma^{-1} \|t^{-\gamma} \partial_j^2 \gamma_k v\|^2 \end{cases}$$

と組みあわせますと、命題3が示されます。

最後に、3)の場合には、補題5を γ に適用しますと、Mとして $\frac{M^2}{16} > \max_{|\beta|=1} |b(\alpha, t, \beta)|$ とおけば、2)の場合と同様に示すことが出来ます。

次に補題4.5の証明の概略を述べましょう。

(補題4の証明)

$$v = t^\gamma w, Q_\gamma = t^{-\gamma} Q t^\gamma \text{ とおく。}$$

$$\begin{cases} Q_\gamma = X + Y \\ X = D_t - t^\ell f(x) \lambda_1(x, t, D_x) + t^{\frac{\ell-1}{2}} f^{\frac{1}{2}}(x) a_1(x, t, D_x) \\ Y = \frac{1}{i} Y t^{-1} - i t^\ell f(x) \lambda_2(x, t, D_x) + i t^{\frac{\ell-1}{2}} f^{\frac{1}{2}}(x) a_2(x, t, D_x) \end{cases}$$

と書ける。 $\lambda_1, \lambda_2 \in L^1$ は $\operatorname{Re} \lambda_j^*(x, t, \bar{s}), \operatorname{Im} \lambda_j^*(x, t, \bar{s})$ を、 $a_1, a_2 \in L^{\frac{1}{2}}$ は $\operatorname{Re} a_{j, \frac{1}{2}}(x, t, \bar{s}), \operatorname{Im} a_{j, \frac{1}{2}}(x, t, \bar{s})$ をそれぞれシルボルとする作用素である。すると、

$$(4) \|t^\gamma Q \gamma_k v\|_p^2 = \|Q_\gamma \gamma_k w\|_p^2 = \|X \gamma_k w\|_p^2 + \|Y \gamma_k w\|_p^2 + 2 \operatorname{Re}(Xw, Yw)_p$$

$$(u, v)_p = \int_0^T \int_{\mathbb{R}^n} t^{-2p} u \bar{v} dx dt, (p \text{ は後で決める数})$$

となる。 $\gamma = \gamma$ 。 $2 \operatorname{Re}(Xw, Yw)_p$ を下から評価したい。 γ_k を γ と書くことにすれば、部分積分によつて、

$$(3.1) \quad 2\operatorname{Re}(D_t \chi_w, \frac{1}{t} \chi_t^{-1} \chi_w)_p = (1+2p) \gamma \| t^{\frac{l-1}{2}} \chi_w \|_p^2$$

$$(3.2) \quad 2\operatorname{Re}(D_t \chi_w, -it^{l-1} f \lambda_2 \chi_w)_p = (l-2p) (\chi_w, -t^{l-1} f \lambda_2 \chi_w)_p$$

$$+ (\chi_w, -t^l f \lambda_{2,t} \chi_w)_p$$

$$+ (\chi_w, -it^l (\lambda_2^* f - f \lambda_2) D_t \chi_w)_p$$

$\Rightarrow \lambda_2^* \in L'$ は λ_2 の L^2 -adjoint. $\lambda_{2,t} \in L'$ は $\frac{\partial}{\partial t} \lambda_2(t, t, \bar{z})$ を $\bar{z} = \text{ホル}$ とす

る作用素である. 同様に.

$$(3.3) \quad 2\operatorname{Re}(D_t \chi_w, it^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} a_2 \chi_w)_p = \left(\frac{l-1}{2} - 2p \right) (\chi_w, t^{\frac{l-1}{2}-1} f^{\frac{1}{2}} a_2 \chi_w)_p$$

$$+ (\chi_w, t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} a_{2,t} \chi_w)_p$$

$$+ (\chi_w, i t^{\frac{l-1}{2}} (a_2^* f^{\frac{1}{2}} - f^{\frac{1}{2}} a_2) D_t \chi_w)_p$$

$$(3.4) \quad \begin{cases} 2\operatorname{Re}(-t^l f \lambda_1 \chi_w, -it^l f \lambda_2 \chi_w)_p = (t^{2p} (\lambda_2^* f^2 \lambda_1 - \lambda_1^* f^2 \lambda_2) \chi_w, i \chi_w)_p \\ 2\operatorname{Re}(-t^l f \lambda_1 \chi_w, it^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} a_2 \chi_w)_p = (t^{\frac{l-1}{2}} (a_2^* f^{\frac{3}{2}} \lambda_1 - \lambda_1^* f^{\frac{3}{2}} a_2) \chi_w, i \chi_w)_p \\ 2\operatorname{Re}((-t^l f \lambda_1 + t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} a_1) \chi_w, \frac{1}{t} \chi_t^{-1} \chi_w)_p \\ = \gamma \left(\int t^{l-1} (f \lambda_1 - \lambda_1^* f) + t^{\frac{l-1}{2}-1} (f^{\frac{1}{2}} a_1 - a_1^* f^{\frac{1}{2}}) \right) (\chi_w, i \chi_w)_p \\ 2\operatorname{Re}(t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} a_1 \chi_w, i (-t^l f \lambda_2 + t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} a_2) \chi_w)_p \\ = \left(\int t^{l+\frac{e-1}{2}} (\lambda_2^* f^{\frac{3}{2}} a_1 - a_1^* f^{\frac{3}{2}} \lambda_2) + t^{e-1} (a_2^* f a_1 - a_1^* f a_2) \right) (\chi_w, i \chi_w)_p. \end{cases}$$

\Rightarrow 一番重要な項は (3.1) と (3.2) の右辺第1項です.

$p < l-2$. $(l-2p) > 0$, (l が 0 の時のみ問題)

$\Rightarrow (1+2p) > 0$ となるものならば. 何でもいいのですが, 簡単の為. $2p = \frac{e-1}{2}$ とします. これは Sharp Gårding 不等式を使えば. $\sigma(-\lambda_2) > e > 0$ です.

$$(3.2) \geq \frac{e-1}{2} (\chi_w, t^{l-1} f (-\lambda_2) \chi_w)_p - C T \| t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \lambda_2^{\frac{1}{2}} \chi_w \|_p \| t^{\frac{l-1}{2}} \chi_w \|_p$$

$$\begin{aligned}
& -CT^{\frac{1}{2}} \|t^{-1} \gamma w\|_p \cdot \|Y \gamma w\|_p \\
\geq & \frac{1}{4}(l+1) \varepsilon \|t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda^{\frac{1}{2}} \gamma w\|_p^2 - CT \left\{ \|t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda^{\frac{1}{2}} \gamma w\|_p^2 + \|t^{-1} \gamma w\|_p^2 \right. \\
& \left. + \|t^{-1} \Lambda^{\frac{1}{2}} w\|_p^2 \right\} - CT^{\frac{1}{2}} \left\{ \|t^{-1} \gamma w\|_p^2 + \|Y \gamma w\|_p^2 \right\}. \\
= = & \text{て。 } D_t = X + t^\ell f \lambda_1 - t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda_1 \text{ と 3 關係式を 使った。}
\end{aligned}$$

(3.3) 及び (3.4) は、絶対値が、 $CT(\|t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda^{\frac{1}{2}} \gamma w\|_p^2 + \gamma \|t^{-1} \gamma w\|_p^2)$ で上が 3 評価される。一方、 λ_2 は $W \times [0, T_1] \times W_k$ で elliptic たる。

$$\begin{aligned}
D_t &= X + t^\ell f \lambda_1 - t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda_1 = X + Q_1(t^\ell f \lambda_2) - t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda_1 + Q_2 \\
&= X + \frac{1}{i} Q_1(-\gamma + \frac{1}{i} \gamma t^{-1} + i t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda_2) - t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda_1 + Q_2
\end{aligned}$$

とかけた。左左 L. $Q_1, Q_2 \in L^0$. 従って。

$$\|D_t \gamma w\|_p^2 \leq C (\|Y \gamma w\|_p^2 + \|Y \gamma w\|_p^2 + \|t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda^{\frac{1}{2}} \gamma w\|_p^2 + \gamma^2 \|t^{-1} \gamma w\|_p^2)$$

といふ評価式を得られる。以上の議論によつて、(4) より。

$$\begin{aligned}
\|Q_\gamma \gamma w\|_p^2 &\geq \frac{1}{4}(l+1) \gamma \|t^{-1} \gamma w\|_p^2 + \frac{l+1}{6} \varepsilon \|t^{\frac{l-1}{2}} f^{\frac{1}{2}} \Lambda^{\frac{1}{2}} \gamma w\|_p^2 + C \frac{1}{f} \|D_t \gamma w\|_p^2 \\
&\quad - CT \|t^{-1} \Lambda^{\frac{1}{2}} w\|_p^2
\end{aligned}$$

が得られる。

(補題 5 の証明). この時 t , γ は i , $v = t^\ell w$ とき, $\partial_\gamma = t^\ell \partial_t + \gamma$ とすれば。

$$\begin{cases} \partial_\gamma = X + \gamma \\ X = D_t - t^\ell f(x) \lambda_1 \\ \gamma = \frac{1}{i} \gamma t^{-1} - i t^\ell f(x) \lambda_2, \end{cases} \text{となる。}$$

左左 t , $\lambda_2 > \varepsilon > 0$ on $W \times [0, T_1] \times W_k$ たる。P として。

$1+2p > 2M$, $-(l-2p) > 3M/\varepsilon$ をみたすよろに達すれば、前と

同じ手法で補題5が示される。

注意 我々は、議論を統一的にする為、modified norm $\|\cdot\|_p$ を用いたが、 $\lambda > 0$ と仮定すれば、 $\|\cdot\|_p$ を使わずに、ふつうの norm $\|\cdot\|$ で議論することができる。

参考文献

1. S. Alinhac & M.S. Baouendi, Amer. J. Math. 102 (1980), 179-217.
2. M.S. Baouendi & E.C. Zachmanoglou, Duke Math. J., 45 (1978), 1-13.
3. A.P. Calderón, Amer. J. Math., 80 (1958), 16-30.
4. S. Mizohata, Proc. Jap. Acad. 34 (1958) 687-692
5. S. Nakane, Proc. Jap. Acad. 58 (1982), 141-149.
6. G. Roberts, J. Diff. Eq. 38 (1980), 374-392
7. H. Uryu, Tokyo J. Math. 5 (1982) 117-136.
8. C. Zuily, Univ. Federal de Pernambuco Inst. de Math. Notas de Curso, N°18 (1981)
9. H. Tahara, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo. Sect. IA, 26 (1979), 213-238, 391-412 27(1980) 465-507.